特 集 Ⅰ　ニューガラスフォーラム 20 周年記念

歴代会長からのメッセージ

「思い出」 Time Flies Like An Arrow

日本板硝子株式会社
名誉顧問　松　村　　實
（1998.6～2000.6　会長）

ニューガラスフォーラムの会長をしていたのは世紀末から 21 世紀にかけてである。

経済・技術のグローバル化の進展の加速化は，ガラス産業も世界をリードする産業にならない限り生き残れない時代としていた。折から，21 世紀を展望して産業分野別の技術戦略策定ニューガラスフォーラムが通産省に於いて進められていた。当初はガラスは入っていなかったが，事務局の努力が実って，セラミクスの技術戦略策定の予算の一部がガラスに充当される事になり，急遽，「ガラス産業技術戦略 2025 年」をニューガラスフォーラムで策定する事となった。短期間にもかかわらず，産・官・学の皆さんの協力で初めて体系的な展望が描け，国の産業技術戦略の一つの分野としてガラスも一翼を担えることとなった。その後も，新しく発足した「ガラス産業連合会」の技術委員会で改訂版を出されているとの事で，産・官・学の共通認識を深め，今後ともわが国のガラス産業発展の一助と成らんことを願っている。

一方，ニューガラスフォーラムでは瀬谷前会長の時に，ニューガラスフォーラム自体が研究に携われるよう定款変更がなされていた。ガラス業界のみならず，ユーザーも会員に持つ団体として，なんとかユーザーも参加した産・官・学の研究開発を進められないか，良いテーマは無いものか，会員・事務局で検討されていた。こんな中で，産・官・学の共同の国家プロジェクトとして「ナノガラス」のテーマが浮かび上がっていた。時折りしも，通産省の工業技術院研究所では独立法人化を真近に控えていた。大阪の工業技術研究所もこのプロジェクトに大いに関心を持っているということで，専務理事と大阪を訪れた。研究所では単に関心を持っているどころか，このプロジェクトを推進するための場所まで空けているとのことで，その場所に案内されるほどの熱意の入れようであった。ニューガラスフォーラムとしても，なんとしても「ナノガラス」を国家プロジェクトに認めてもらうよう努力せねばと思った次第である。その後，国家プロジェクトの一つとして選定されるよう，専務理事と関係機関に提案説明に回ったが，工業技術院の当時の増田審議官には特によく話を聞いていただいた。技術のことは良く分からない事務屋でと前置きして，良い製品を作るには如何に源流が大事であるかガラス繊維に携わった頃の経験を話し，優れた素材なくして画期的な製品はない，是非「ナノガラス」を応援して欲しいとお願いしたものである。その後の関係各位の努力で「ナノガラス」がニューガラスフォーラムとして始めての産・官・学の共同の国家プロジェクトとなって研究が進められ，その成果も，数ある「ナノテクノロジープロジェクト」の中でも「ナノガラス」の評価が高いと聞いて喜んでいる。今後とも産・官・学の共同研究がますます進展し，日本のガラス産業が世界をリードする産業として成長することを願って止まない。